

美術工芸文化財の 保存修復用洗浄に関する研究

(平成27年度学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)に採択)

社会学部現代社会学科
関根 理恵 講師

文化財とは、どのようなモノを指すのでしょうか。文化財保護法では、「有形文化財」、「無形文化財」、「民俗文化財」、「記念物」、「文化的景観」および「伝統的建造物群」と定義されています。その他、土地に埋蔵されている遺物を埋蔵文化財と呼び、これも文化財として扱われています。

従来、これら文化財における芸術学的研究では、文化財の形状や文様、材料、銘文の解読などの分析によって、作者の特性把握や、制作集団の特定、美術史や技法史、材料史、文様史など、年代考証を含む史学的研究、文化の伝播に関する地域研究などが行われてきました。

その際に行われてきた主たる研究手法は目視観察であり、その他、古文書解析や文献資料による照合などの人間の感性に頼る研究解析が主でした。現在の文化財研究では、従来の研究手法に加え、自然科学的手法が積極的に取り入れられています。文化財に対する自然科学的研究の必要性は、昭和八年頃から瀧精一博士によって提唱され、芸術分野の新しい研究手法として人々に認知されるようになりました。そして第二次世界大戦後、急速に発展しました。発展のきっかけとなったのが、法隆寺金堂の焼

損です。焼損した壁画の保存に関する研究が急務とされ、文化財に使われている材料、文化財のコンディション、文化財の構造についての研究が、第一線の研究者によって行われました。そして、文化財を保存するための学問『文化財保存学』という新しい研究分野が誕生しました。文化財の保存に関する研究は、法隆寺金堂の問題だけではなく、第二次世界大戦による被災、金閣寺の火災なども背景にあり、文化財保護法が新しく公布され、昭和25年8月28日に文化財保護委員会が発足するなど、文化財保護の措置が国家政策の中に取り入れられたことも、研究分野の発展を後押ししたと考えられます。

『文化財保存学』の研究分野は、主に文化財の分析研究(素材研究と伝統技法研究)と保存修復に関する研究(修復材料研究と保存修復技法研究)の二つの分野に大分されます。今回の「美術工芸文化財の保存修復用洗浄に関する研究」は、保存修復技法に関する研究です。

この研究をしてみようと考えたのは、エジプトの遺跡から発掘された6世紀の織物の研究でした。ミイラの体液が付着している織物を取り扱っている時に、この体液を抽出することができたら、

DNA解析実験でどんな人が包まっていたのかわかるかもしれないと考えたのがきっかけでした。そこから発展し、体液を抽出する方法を考えているうちに、まずは洗浄する方法を開発し、洗浄廃水から体液を抽出しようと考えました。

文化財の保存修復において、まず初めに行う処置は、クリーニングです。クリーニングには、大きく分けて乾式クリーニングと、溶剤などを用いたクリーニングがあります。今回の研究は後者です。保存修復技法に関する研究においては、修復作業従事者に対する安全性や、技法の簡易さなどへの配慮が求められ、よりよい保存修復技法の開発を目標としています。また同時に、そこで用いられる保存修復材料の特性を把握することも、重要な研究項目です。

今回の研究では、顕微鏡による観察などを通して、微視的に汚物の付着状況と洗浄により除去された状況を明らかにしたいと考えています。

研究しなければならぬ事項は、多岐にわたります。大変複雑になることが予想されますが、一つ一つ実験を行い、事実確認と考証を繰り返しながら、文化財の保存修復に最適な洗浄技法と洗浄用材料について探求していきたいと考えています。